

歐洲動乱と我国の科学界

石原 純

いつ勃発するかと想われていたヨーロッパの戦乱も、遂にその火蓋を切った。この戦争がどれほど続くかは今はわからないが、恐らく長期にわたるであろうというのが一般の予想のようである。そうなれば、之が世界の科学界への影響も尠なくないであろうし、延いては我が国でも、そのまま安泰に過ごすわけにはゆかないかも知れない。そこで我が国の科学者も、予めその事を覚悟して各自の研究を進める適切な方法を講じておかなくてはならないのである。

それにつけても、私には廿五年前の世界大戦当時の有様がおのずから想い起されてくる。勿論、その頃と今日とは多くの事情が異なっているから、その当時に経験した困難がそのまま繰返されるわけでもないであろうが、それも種々の意味で参考となるには違いあるまい。その当時先ず何よりも困ったのは、學術雑誌の杜絶であった。

尤もその大部分は多少遅れがちながらも、手にすることはできたのであるが、私などの専門では特にドイツの雑誌が必要であったのに拘わらず、肝腎のそれがまるで来なくなつて了つたのであった。之にはいかにも心細い感も味わされた。その頃には国内の学者とても同じ専門に属するものが極めて尠なかつたのであるから、殆ど話相手もなく、荒野原にただ一人だけ放り出されたような有様に過ごさねばならなかつた。しかも雑誌が見られないとなれば、それは恰も他から養分を摂取しないで生きてゆくと同様な苦痛にも陥るわけである。そんななかで、止むなく自分一人で孤独ながらもともかく研究に従事していたのであった。

大戦中のドイツの雑誌が手に入れられたのは戦後一、二年の後であった。その中には、誰も今では知っている例のアインシュタインの一般相対性理論の原論文や、ゾンマフェルト及びその他の人々の量子論に関する重要な論文なども載せられていた。

ドイツが全国力を賭しあらゆる困難に出遇つて烈しい戦争を続けていた間に、このような純粋な学術的研究が国内でなお続けられて居り、それを載せる学術雑誌が絶えず刊行されていたと云うことは、実に驚くべきことであつて、私はここにこそ、西洋諸国に於て既に輝かしい伝統となつている、純粋学術尊重の最も高貴な精神を見ることのできると思つてゐる。それに比べると、現在我が国などで、純粋の学術研究の如きはこの非常時に於てはまさに遠慮して中止すべきであると説く人々があるのを見て、いかにもその卑俗な見解に呆然たらざるを得ないのである。今後幾十年か経つて、国際的の危機が新たに東洋を見舞わないとも限らない。その際に真に力となるものは、科学の本質的な進歩であることを悟るならば、今からこの純粋な科学をしつかりと捕捉しておかねばならないのは云う迄もないであらう。

この外に、前大戦当時には我が国が英仏聯合軍側に参戦したので学術論文の如きものでさえも、それ迄いつもドイツ語で発表していた私などには、やがてその儘ドイツ語を使うことが何かしら憚られるような周囲の空気を感じるようになった。之などは後に見れば何でもないことのものであるが、その当座は妙にそんな事にさえ敏感であつたのである。斯うして四年を過ぎて、平和が恢復されたときには、我々のような学究の間にもほつとした気安心が戻つて来たのであつた。

以前の大戦当時に比べて之等の事情は、今ではよほど違つてゐる。先ず第一に、今日はアメリカで科学の進歩が極めて顕著であり、多くの重要な論文がそこで発表されている。だから之との交通が妨げられない限り、我が国の学界もさほどの孤立を感じないに違いない。この事は、たとえ今後アメリカが参戦する運命に導かれたとしても、

なお戦地から遠く離れているだけに、甚だしく心配することはないであろう。更に現在では国内の科学者の数も大いに増しているから、その間に適当に意見交換を行う便宜もないわけではない。だから我が国の科学者も、比較的に心強くその研究を続けることができると思われる。

併しその代りに現時我が国が支那事変に携つて居り、之に伴つて統制経済が著しく強化され、すべての物の輸入が困難になっているのは、確かに非常な不利である。尤もこの事は歐洲戦乱に直接に関係することではなく、既に以前からその不便を感じていたのであるが、今後それが一層増大するとすれば、それは科学研究の上にも、多くの不安を持ち来さないわけにはゆかないであろう。

今では雑誌や図書の輸入は或る程度まで許されているが、器械や諸原料については既に多くの不自由がかたれている。之は一方で科学奨励を今日の急務として頻りにその方法が講ぜられているのに対して、明らかに政策上の矛盾であることを私は幾度か論じたが、今後ともそれが緩和される望みは殆どないかの如くに見える。本年度に於て、文部省では従来に例を見ない程の科学奨励費の予算を獲得したとは云え、寧ろ実際に必要なのは精密器械や原料の供給であることをはっきりと認めなくてはなるまい。

さて、ともかくも、このような情況のもとに、我が国の科学が今後どんな有様を呈するであろうかという問題に対しては、一概に予想を述べることは困難であるが、結局は科学者自身の努力と、一般からの之に対する協力の如何に依ると見なければならぬ。

前大戦当時にも著名な科学者にして戦歿したり、又は不慮の災禍に仆れた人々がかなりにあった。それらは直接の損害であるし、その他に於ても軍事科学の研究などは進められても、一般には科学研究の阻害せられることは当然である。それだけに我が国にとつても、外部からの刺戟が多少とも減ずるわけであるから、その代償としては国内に於て一層研究精神を鼓舞しなければならぬ筈である。

この事に^{かんれん}関聯して、私は特に我が学界に於て討論を盛んにすべきことを切実に希望している。由来、我が国に於てはかような討論や相互の意見交換が多く行われなことが、学界の一大^{けつてん}缺點と見^み做^なされていた。それには種々の原因が考えられるが、最も主要なものは我が国の学者が主として外国の学者のみを対象としていたことにあると推察される。

かくて国内の学者をさほど相手にしない傾向が生じたり、時には^{しつこく}殊更に中傷的な^い忌^まわしい討論などが現われて、一層それが毛嫌いされるようになる。之に^{これ}反して西洋諸国では学者が相互に^{こうかん}交驩する機会が極めて多く、従つて相互に熱心に論じ合うことが著しく科学の進歩に役立つているのは疑いもない処である。地理的に遠く離れている我が国では、それに仲間入りすることが困難である以上、せめて国内に於て、この事が一層盛んに行われなければならぬ筈であるのに、事實は却^{かえ}て之に^{これ}反するのは、極めて遺憾でなければならぬ。更に之と^{これ}共に外部からの協力も必要であるのは云う迄もない。何れにしても、私はこの機会に於て^{あえ}敢て学界の多大な自重を望み、やがて何等かの方面に於て、みごとに優れた業績を挙げんことを期待して止まないものである。

(昭和十四年十月)

- 底本には、『科学のために』（科学主義工業社、一九四一（昭和十六）年一月二十五日）を使用した。
- 読みやすさのために適宜振り仮名を追加した。
- 旧漢字は新漢字に、旧かな使いは新かな使いに変更した。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{dvi} \rightarrow \text{pdf} \rightarrow \text{m} \rightarrow \text{x}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、
「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。